水牛通信　毎月1回10日発行　1985年5月10日発行　通巻70号　1980年5月23日第三種郵便物認可

水牛通信

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

そして、わたしを谷へ行かしめよ ——ある黒人女性の百年の生　藤本和子　2

小僧寿司　玖保キリコ　22

流れた時のゆくえ　藤井久子　24

サイアムホテルの女たち ——エン　荘司和子　28

編集　八巻美恵

VOL.7 NO.5
毎月1回・10日発行
定価200円

そして、わたしを谷へ行かしめよ
―ある黒人女性の百年の生

藤本和子

録音したテープを聴きながらおこしたタイプのページを眺めていると、またアニー・アレグザンダーさんの声が聞こえてくるのだ。もう、あれから四年近くになる。小さい時から、声が大きいぞ、アニー、おまえは声が大きい、そんな大声で話すもんじゃないといわれてきましたよ。いま、耳が遠くなってしまって、また声が大きくなっているかもしれませんね。そういいながら、澄んだ声で語って、ある瞬間は、突然うとうとしたりということもあった。

突然うとうとしてしまう、というのも当然のことだった。それは、南部で死者も出るほどのひどい暑さの続いた一九八十年の夏の一夜で、八時から始まったわたしたちの会話は、最初の予定よりも長く続いていた。そして、アニー・アレグザンダーさんは百四歳だった。

陽の落ちるのがおそい七月の夕暮れ

時からの残光はいつまでも部屋の中にとどまるかと思われたが、それは突如消えて、暗さが訪れ、ひとたび暗さがやってくると、それはあっという間に深さを増した。

誰もかれも、暗さの中に沈んでしまうように感じられた。アニーさんも、同席した看護婦のフィリスもわたしも。スタンドが二つあって、明りがともされたが、電燈の光は暗さの海に浮かぶ小島のようで、世界全体はその時やはり黒ずんでいた。

いまも、わたしは薄闇をすかすようにして、向かい側のアニーさんの姿を見すえようとしているかのようだ。眼鏡のガラスが鈍い光を放つこともある。彼女はドレスを着て、模造真珠の長いネックレスをつけている。ドレスは長い歳月を経てきたもののように見える。縮みのような生地で、茶の地にこまかなプリント模様がある。いや、そうであったように思えるのだ――。わたしを迎えるために彼女が正装してくれたことを、わたしは知っていた。自分の服装は記憶していない。アニーさんがドレスに着替えていたことにふさわしい身なりをしていたように、と願うのだが。

幾人もの黒人女性を介して、アニーさんに会うことができた。たいへん高齢の女性がいるが、と誰かが誰かにいってくれて、その誰かがまたわたしがその時泊めてもらっていたスペルマン大学の学長の夫人に提案したのだった。学長夫人の名はイザベル・ステュワートといったが、イザベルがアニーさんに関する情報を逆にたぐりなおして、会う手筈をととのえてくれた。イザベルが車で送ってくれた。坂の上にあったアニーさんの家まで。

それは大きくはないが、ひどく小さいともいえない二階建ての家で、一階と二階がそれぞれ独立した住居になっていた。アニーさんは二階の方を人に貸して、自分は下の住居に暮していた。二階の家賃が生活費だった。居間と台所と浴室と寝室と食堂があったと思う。けれども、食堂の場所が思い出せない。そればかりでなく、間取り全体がはっきり思い出せないのは、どうしたことだろう。夢に現われる部屋は、いつも全体に明るいことはなくて、できごとの生起している空間だけがぼおっと浮かび上がっているものだが、ちょうどそれと同じように、アニーさんに会った時の家の中の光景には、隅々を照らす明りはなくて、記憶の中の像はそろってぼおっと薄い光の中に浮き上がって見える。

そのことに二重の、抽象的な意味があるわけでもない。ただ、そこは電燈の明りのあまりない家だっただけなのだ。わたしが暮れなずむ時間から十二

時頃まで長居した、ということにすぎない。もうすっかり視力を失くしていたアニーさんは、電燈の明りにたよらずに、身のまわりのことを全部自分でしながら、独り暮しをしていた。

こういう日本人が黒人の女性の話を聞き歩いているが、話してみる気はあるか、とたずねられた時、アニーさんは、神がこれほど長生きさせてくれたのは、いつかわたしの話を聞きにくる者があることを知っていらしたからですね、と答えた、ということだった。でも、困りましたよ、と彼女はいった。わたしは日本語はひとことも喋れません、どうしましょう？

日本人がアメリカの黒人の情況に興味を持つんですか？　という問には、それまで幾度か出会ったが、そのようなことは問わず、問わぬばかりか、わたしは日本語ができない、困りました、という反応ははじめてだった。だから、わたしはアニーさんに会うのをとても楽しみにしていた。

フィリスという看護婦の女性がアニーさんの家にきているから、彼女がいろいろ助けてくれるだろう、ということだった。アニーさんの世話や、彼女に疲労の色が見えたら会話を中断したほうがいいと判断することもできる。フィリスは病院で、夜の十一時から朝の七時まで勤務していたが、その日は病院の仕事のほうは休みだった。ふつうは病院の仕事を終えたその足でアニーさんの家へやってくる。アニーさんの世話については、どうもボランティアとしてやっているようだった。彼女はフィラデルフィア出身の黒人の女性で三十五歳だったが、いまはラビについてユダヤ主義の勉強中よ、といった。朝病院の帰りに、アニーさんの家によって、あれこれ面倒を見てから、ラビのところへ行く、といった。じゃあ、あなたはいつ眠るの？　そうね、適当に眠るのよ——。フィリスは元気いっぱいのひとで、しじゅう大声で笑ったが、アニーさんの話を聞く機会に同席できるのは嬉しい、あたしもいろいろ知りたいからねといった。

一昨年の夏、東京からシャンペンの町へもどって、留守中に届いた郵便物の中に、ヘンリエッタ・ランディという知らないひとからの手紙があるのを発見した。

わたしはアニー・アレグザンダーの従妹です。彼女の葬儀のプログラムを同封します。彼女は（生きていたら）あなたからの便りとあなたの著書を受け取って、きっととてもよろこんだことでしょうに。お望みなら、ご本は返送いたしますよ。

ご健闘を祈りつつ。

ヘンリエッタ・ランディ

葬儀の際に印刷された式次第の日付けは一九八二年六月二十六日になっていた。亡くなった時、アニーさんは百六歳だった。式次第の表紙に印刷された写真の彼女は、わたしが会ったアニーさんよりずっと太っている。わたしが会ったアニーさんはやせて細かった。

アニーさんの死去の報せに、わたしはそれほど驚きはしなかったが、こころから残念ではあった。もっと長く生きることができたらよかったのに、と思った。お送りした本は、お邪魔でなかったら、どうぞそのままにしておいてください、とわたしはヘンリエッタさんに返事を書いた。そのようにさせてもらいますと返信がとどいて、またアトランタをおとずれることがあったなら、どうぞ寄ってくださいと付け加えてもあった。いつ行けるか見当もつかないが、再びアトランタへ向かう機会があったら訪ねてみよう。アニーさんの住んでいた家も、もう一度見に行こう。ここはね、ファウンドリー通りとウォルナット通りの角だから、それだけ覚えておくこと、道路工事やいろいろ掘り返しているから、こんどきたら、大分様子が変ってしまっているかもしれない、ファウンドリーとウォルナットの角と、しっかり覚えておきなさいよ、とフィリスが大きな声でいっていた。そのフィリスとわたしに、アニーさんが話してくれたのは、次のようなことがらだった。

このくらいの声で聞こえますか。お生まれになった時のことから話してくださいますか。何年でしたか。

アニー　一八七六年でしたよ。

どこですか。

アニー　ジョージア州アトランタで。フルトン郡ですよ。

所番地もご記憶ですか。いまはそこに何が建っていますか。

アニー　たっているって、どこに？お生まれになった場所に。

アニー　いいえ、わかりません。町のどのあたりかしかわからないですよ。北アトランタでしたよ。

ご家族のこと、話してくださいますか。

アニー　わたしは四人きょうだいの一番上で、父と母はごくふつうの人た

ちでした。当時は奴隷制が廃止されてからまだ長くは経っておらず、何もかもが貧しいのでした。全然うまくいっていないのでした。奴隷であった人びとは、自由の身になってからほどなくのことでしたから、住まいとか、そういうものをまだ手に入れることもできないでいたのでした。だから生活は苦しかったのです。父は強いひとでなかったので死んでしまいました、わたしが五歳くらいの時でした。そこで祖母が二人の子どもを引き取り、母はあとの二人を手元に置きました。皆働いて……わずかばかりの収入でしたが、それで生計を立てたのです。学校とかそういうものもなくて、何も何もない暮しでしたが、力のかぎり生きたのです。やがて、ようやくのことで落ち着いてきて、人びとは教会などを組織しはじめました。そういう風にして、ボストンやニューハンプシャーなどから、北部の人たちがやってくるまで持ちこたえたのですよ。北部の人たちは、住居も何もなく、ただ放り出された奴隷のことを気の毒に思ったのですね。何も与えずに、ただ放り出したのですから。白人は彼ら自身、南部にあったものはもうすっかり使い果していたので、黒人に与える物なんかなかった。戦争で、南部にはもう何も残っていなかった。ようやく、状況が少しよくなってきました。北部の人たちが奴隷にいろいろ物をくれたのですよ。自由の身になった奴隷たちを助けたのですよ。

わたしの母は十二歳になるまで奴隷の身分でした。十二歳の時に自由になったのです。祖父や祖母はほんものの奴隷だったわけですよ。ね、このように、当初はつらいことばかりでした。

父上が自由の身になられたのは、おいくつの時だったでしょうか。

アニー　三十歳ぐらいだったでしょう。そのくらいと思いますよ。父と母は若く結婚したと思いますよ。苦しい生活でした。

フルトン郡へ移られる前、ご両親はどこで働いておられたのでしょう。

アニー　働く場なんかなくて……だいたいは農夫だったのですから……棉作の土地で。おおかたは畑で働いていましたよ……どこで働いていたか、とはどういう意味？

農園（プランテーション）で働いておられましたか？

アニー　そう、そうですよ。いろんな所で。いろいろなところを点々として。

どこの農園からこられたかはご存じありませんか。

アニー　いいえ、いいえ。知りません。

どこからかこられて、アトランタに住まれるようになった……

アニー　そう、そうですよ。

ご両親は奴隷制が合法であった時代のことについて話されましたか。

アニー　そうですね、話すこともありましたよ。でも、話の内容は、奴隷の時代には秘密にされていたことがらでしたよ。秘密の集会を持ったこととか……そう、祈禱集会も秘密でやったと。昔は、祈ることは大切だと考えられていましたからね……ひどく苦しい困難な人生でした……一番高い値をつける者に売り渡されたりして。わたしはそういう体験はしませんでした。わたしが生まれた時には、もう解放宣言があった後でしたから。黒人の教育ということも考えられていました。奴隷制の時代には教育施設など全くなくて、教えたことといったら働くことだけでした。彼らが知っていたのは、そのことだけでした、働くことだけ。教師もおらず、学校もなかったのですよ。でも、わたしが生まれた時は奴隷制度は廃止されていて、廃止されてから十年以上たってました。その間、北部からやってきて学校を始めた人びとに助けられて、やってきたのです。

奴隷制の時代はほんとにひどかった、と人びとはいってました。人間らしい扱いも受けず、ただもう必死に生きたのです。黒人の暮しは苦しかった。アフリカからやってきたのですものね。何も知らず、何も教えてもらえなかった。奴隷制が廃止されて、ようやく教育するようになったけれど、それでも学校はひどいものでしたよ。だから、黒人は将来に対して大きな期待を抱くことはできなくてね。

わたしの祖母は学校へ行きました。スペルマンです。当時は大学ではなかった。ボストンかどこかからやってきた二人の婦人が始めた学校でしたが、そこで祖母は文字を読むことを習い、聖書を読むことを習ったのです。

おかあさんではなく、おばあさんが学校へ行かれたのですね？

アニー　父が死んだ時、わたしは祖母の所へ身を寄せることになりました。母と一緒には暮さなかったのです。わたしは長女で、妹と祖母の所へ行った。

母は下の二人を手元に置きました。二人はまだ小さかったから。末の子は生後六ヵ月ぐらいだったでしょう。まだ赤んぼうだった。わたしは五歳か六歳でした。

おばあさんがスペルマンへ行かれた時は、おいくつでしたか。

アニー　奴隷制が、いえ、解放が宣言された当時祖母は六十歳か七十歳だったのですから、ずい分苦労したのでしょうね。でも、（学校を始めた）人びとが何を目ざしているのかを理解すると彼女は喜び、学校へ通ったのです。そして、聖書が読めるようになりました。

それは女子聖書学校というような名で呼ばれていたのではありませんか。

アニー　そうでした。女子学校でした。その二人の婦人はキリスト教の聖職者でした。南の地の飢饉のことなどを聞きおよび、宣教師としてやってきました。やってきて助けたのです。年寄りの行く小さな学校を始めました。そして年寄りたちが若い者たちを誘い入れたのです。それがスペルマンの起こりです。祖母は最初に入学した人びとの一人で、わたしが文字が読めるようになることを切望していました。わたしは読めるようになりました。何もかも読みました。聖書や、何もかもです。祖母はわたしがその人たちによって教育されることを心から願っていたのです。

こんなことは、ほんの一端です。教育を受けられるようにするための人々の努力の一端ですよ。他の連中もやってきて、学校を作りました。宣教師が送りこまれてきたのです。そして、学校はどんどん盛んになりました。黒人はそのことを喜びました。黒人には何の特権もなかったのですよ。奴隷として使われて、その後自由の身になってすら、仕事といえば、農園（プランテーション）のそれだけでした。それと、たしか、汽車のポーターという仕事もありましたっけ。畑の仕事につけない男たちは、鉄道で働くこともあった。そうやって暮しをたててましたが、とても貧乏でした。でも、何とかして……やっていた。

祖母はがんばるひとでした。そしてわたしにも、なんとかできるだけの教育を受けさせようとした。死ぬまで、そうしました。祖母が死んで、いうまでもなく、わたしは独力で生きなければならないことになりました。妹と弟の面倒も見ました。働きながら、スペルマンへ行きました。スペルマンへ行き、学び働きました。

おばあさんが亡くなられた時、あなたはおいくつでした？

アニー　二十五ぐらいでしたでしょう。まだ若かったのですよね。しばらく働き、しばらく勉強する、という制度があったのです。

どういう仕事をされましたか。

アニー　台所で皿を洗う手伝いをしたり、鍋の汚れをこすり落としたりしてね。スペルマンでそういう台所仕事をしていたから、授業料が払えたのです。だって、わたしは文なしでしたから。そのようにして勉強したことはためになりました。聖書を読み、学んで。わたしは聖書について教え、仕事のしかたや裁縫なんかを、あれこれ教えてくれる学校にいたのですものね。スペルマンや他の学校は黒人の教育におおいに貢献したのです。

おばあさんが生きておられる間も働かれましたか。

アニー　働くようになったのはおもに、祖母が死んだあとです。自分の生計を立て、妹などを助けるためでした。よその家へ行って、子守りをしました。洗濯屋などはなかったので、洗濯物を預ってきて、自分のところで洗う仕事もありました。お金の入ることなら、何でもしました。でもね、五セントでパンが一斤買えたのですから、大金はいらなかった。（笑って）働きさえしたらよかった。

フィリス　五セント受け取るためには、どのくらい働かなければならなかったの？

アニー　（笑って）くれる分だけ受け取ったのですよ。それ以外には……。

フィリス　大籠にいっぱいの洗濯物を洗って、やっと五セントでしたか。

アニー　ああ、あなたは洗濯物のことをいっているのですね。衣類をまとめて束にしてね、一束二十五セントとか、五十セントとか請求してましたよ。払ってくれるだけもらったんですよ。

スペルマンに通われ始めたのはおいくつの時でしたか。

アニー　十八か十九の時でしたよ。スペルマンをやめてからは、働くだけでした。よその家で。祖父が死ぬまでは、援助してほしいと頼み続けたのですが。もちろんね、お金をくれという

のではなく、家に置いてほしい、できるだけ働くからと。そうしたら、昼間スペルマンへ行けたのですから。

わたしは料理人として働きました。子守りとして働きました。いわれれば何でもしました。そうやって当時は暮したのでした。かなり苦しい生活でしたが、北からきた学校は南部が今日の南部になるのを助けたのでした。働きたいと思う黒人には仕事を教えたのです。白人種はすべてを管理していました。すべてを掌握してました。自由が宣言された時、黒人には何もありませんでした。黒人は「出て行ってよろしいが、わたしらにはおまえたちにやる物は何もない」といわれたのでした。そしてね、肩に荷を担いだり、棒に荷をつけたりして行く黒人の群が何マイルも何マイルも続いたというのですよ。生活できる、どこかよその土地へ向かうのに持って行けたのは、それだけでした。でも、教育者たちがやってきて、時代は明くなったようでした。それが今日の南部を培ったと、わたしは考えるのです。それが貢献したと……。

フィリス　スペルマンの教師の家などで働いたの？

アニー　そうでもなかった。仕事をくれるといえば、誰の家でも働いたから。

フィリス　旅に出る一家について旅行するようになったというのは、いつのことでした？　ウェア一家とか？

アニー　祖母たちが死んでしまってからでしたよ。やめて間もなく……そう、アトランタ大学でも働いたし、スペルマンでも働いたし……わたしはあらゆる所で働きましたよ。

フィリス　一緒に旅をした一家は誰でしたっけ？

アニー　アトランタ大学の学長で、ウェア博士。小さな男の子が二人いて、夏の休暇で出かける時は、保母としてついて行ったんですよ。そうやって、わたしは暮しを立てていたのですから。スペルマンでいろいろな仕事のしかたを習った。つまり生計を立てる方法をね、なぜならわたしは自活していたのですから。それ以来ずっと、わたしは働き続けてきました。

フィリス　ご主人のこと、話してあげれば。

アニー　そう、夫は結婚して……結婚した時、わたしは伯母と暮してましたよ。娘に死なれて、誰も世話をする

者がなかったので、わたしが面倒を見てました。ホワイトホール通りの家の料理人をしていて、なんとかやっていたのですよ。一体どうやってやっていたのかと、自分でも不思議なほどですけれど。神の恵みは深く、それにわたしはわりと教育を受けていたから。もちろん、学校は卒業しませんでしたが、働けばうまくいったし、だから卒業しなかった。夫と結婚して、ここへ引越しました。その後もパートタイムで働いたのですが、それはわたしの意志でそうしたのです。自分の家族の面倒を見るためにね。働かないわけにはいかなかった。でも夫はとてもいいひとでした、とてもよい夫でした。そのことを神に感謝してます。

フィリス　この家はご主人の持家だったのでしょう？　あなたの夫になったひとは、町のあちら側に住んでいたあなたと伯母さんをこちらへ引き取ったのでしょう？　ご主人の両親はかつて奴隷だったのかしら？

アニー　そうでしょう。

フィリス　この家のね、裏庭には以前家畜小屋があったのでしょう？

アニー　そう、そう。

フィリス　ご主人は荷馬車屋（ドレイマン）だったの。荷車とそれを牽く動物を持っていたの。たいていは馬だった。馬を持っていたんですよね。何頭いました？

アニー　たったの一頭きりでしたよ。夫はわたしと伯母と彼女の姪を引き取ってくれて、ほんとにやさしいひとでした。わたしたちはここに住むようになったけれど、ここ、この階下はね、わたしが移ってきた時にはなかった。生活はうまくいって……夫とは八年ぐらい一緒に暮したのだったかしら。それから、死んで。その時、階下に部屋をつくろうと考えてね。それからずっと階下に住んできた。

フィリス　結婚した時はいくつだったの？

アニー　三十代でしたよ。夫は三歳ぐらい年上でした。この歳になるまで、困難な人生でしたよ。いまではこうして自分の家に住み、住む所もない、と心配しないでもすむ。ありがたいことです。北部からやってきた学校はね、黒人が新に得た自由を使えるように準備してくれたのだと思いますね。それ以前には、自由は一切なかったのですから。職を得る方法を教えたのです。

ワシントンも……ブーカー・T・ワシントンも……そう、助けましたよ。

フィリス　アニーさんは百二歳の時に、浴槽の中で転んで、あばら骨を折ってしまったの。復活祭の朝のことで、彼女は教会へ行く計画を変えなかった。照っても降っても行くひとだから。でも、痛みがあまりにもひどくなったので、病院へ行った。三、四週間の入院の後に、彼女は独り住まいを諦めて、やはりそろそろ養老院へ行くべき時がきたのかもしれないと考えたのね。そして養老院へ入ったの。四、五週間、そこにいたかしら。

彼女には自分の子どもはなかった。養女が一人いたというのだけれど、結婚して二人子どもができた。親類の子どもで、養女のようにしていた。伯母さんの子どもだったそう。その女性は六十歳で亡くなった。晩年は一緒に暮そうと話し合っていたのに。

養老院では、彼女は独りの暮しに戻るべきかもしれない、という話が起こった……養老院にいて、どんどん衰えはじめたから。家へ帰して見よう、ということになってね。その時に、わたしが関係を持つようになったの。

何もかも自分でするの。わたしは時間のある時にきて、高い所にある物をおろしてあげたり、ドレスのジッパーを上げてあげたり、診療所へ連れて行ってあげたり、電話に出てあげたりする。彼女は食事も作るし、ほんとに独りでやっていけるのよ。元気で活発。〈シックス・フラグ〉という遊園地があるのだけれど、彼女は百歳を超えているから、無料なのよ。で、彼女は、いいですか、あたしは〈シックス・フラグ〉にただで入れるんですからね、あたしと行きたいひとは、遠慮なしにそういってくださいよ、というわけよね。年寄りは人混みはいやがるものだけど、彼女は元気いっぱい、出かけて行くの。きょうも医者へ行ったけれど、何も問題ありませんよ、ということだった。

アニー　どういう言葉でいったらいいのか、わからないけれど、わたしはずっと一生ただ働き通しできましてね、だから、労働の報いがあったのだ、というふうに考えるのですよ。あなたの知りたいこと、教えてあげるにはあまりにも無力で……もっと力があったらと思うのですよ。

視力も衰え、聴力も衰えて……よく聴こえないし、それに思考力も衰えてしまったので、あなたの期待にそえるかしらと……

最も困難でつらかったことは何でしょう？

アニー　それにはどう答えたらよいかも、わかりません。つらいことがあまりにも多かったから。親を失ったこと、夫を失ったことやら。とてもつらかったのです。でも、しかたがない。何もかもうつくしく、というわけにはいかないのですものね。雨や曇りの日もある。そして陽の照る日もあるのです。ふつうの人々よりひどい目に会ってきたとは思いません。ごくふつうの生と死でした。愛する者たちを失うことはとてもつらい。でも、避けられない。陽の光と雨、人間には二つながら必要なのですから。

しあわせを神に感謝しています。ふつうの人々より苦しい人生というわけではなかった。

毎日生きて、どうにかやっていく、そのことだけですばらしいと思う。生きて、くよくよしない、それはすばらしい。

わたしは……以前には……頭によい考えも浮かんだものでした。でも、もう上手にものを考えることができなくなってしまったから、人生をそのままそおっとしておくのですよ。くよくよ心配しないで、その日その日を送りたい。

わたしは黒人民族に起きたすばらしいことをありがたいと思う。黒人民族は機会も持たない者でした。他の民族と同じ機会はなかった……黒人の中でも、地位の向上した者たちはいます……でも、大多数はまだ。わたしたちはまだ下層にいます。たたかい続け、祈り続ければ、いつかはよくなります。北部からきた学校は南部に奇跡をもたらしましたよ、南部をつくったとさえいえますよ、ねえ、そう思いませんか？　ここに住んでいた南部人たちは、わたしたちに教育を受けさせたくはなかったのですからね！

お疲れになりました？

アニー　だいじょうぶですよ。どんな質問にも答えますよ！

一生働き通されましたが、労働をやめられたのはいつのことですか。

アニー　そうですね。そう……五年ほど前のこと。あなたは賃金をもらうために働く、という意味で訊ねているのでしょう？　それなら、五年ほど前のこと。それ以来、家にいて……

ほとんど百歳になるまで働かれたのですね。

フィリス　いまだって、機会があれば働いていたわよ。小さな子どもたち

がこの家へ遊びにきたりすると、「ああ、この子たちが早くもう少し大きくなるのが待遠しい。そしたら、わたしが世話できるのだから」と彼女はいってね。もし、この二、三年に、わたしに子どもがいたら、きっと世話をしてくれていたと思うの。できるのですもの。あまり小さい子どもだと、ちょこちょこして、ひとところにとどめておくことができないから難しい。でもね、わたしが裏の部屋を改修するのをデビーが手伝ってくれた時には、彼女はデビーの赤んぼうの面倒を見ていたのよ。立派にね。わたしの友人で、妻が八十歳で、夫が九十歳という夫婦がいるんだけれど、夫のほうは少しぼけてきたので、ふらふらとどこかへ行ってしまわないように注意してることが必要なの。わたしが奥さんが出かけられるように行く時は、アニーさんもきて、夫のほうを見守っているわけ。

アニー　子どもの世話をするのが、わたしのおもな仕事だった。二、三の場所で料理人をしたこともあった。ピーチ通りの家庭などでね。一番長く勤めたのは、ミセス・ハミルトンとメンフィスへ行った時でしたよ。娘さんの守りをしてね。それから娘さんが結婚して、四人の子ができて。それが最後の大きな仕事でした。メンフィスへ行って、彼女の子どもの世話をしたのが。

フィリス　ハミルトン氏は州議員だった。

黒人ですか。

フィリス　そう。

ミセハ・ハミルトンの家では何年ぐらい働かれましたか。

アニー　思い出せません。ずいぶん長いことでした。

ピーチ通りで料理人として働かれた時はおいくつでした？　八十歳か九十歳になっておられましたか。

アニー　いや、そんな歳にはなってなかった。歳をとって、もう記憶がさだかでないのです。思い出せません。

フィリス　マーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺される以前のこと？

アニー　暗殺される以前でしたよ。

フィリス　彼女は客をもてなすことが好きでね。いろんな人が、ミセス・アレグザンダーの夕食会や集りについて話すのよ。人びとをくつろいだ気分

にさせるのがうまいの。教会の活動も献身的にしてきた。人とのつきあいは、おおかた〈友好バプティスト教会〉を軸にしてあるのよ。スペルマン大学の……

アニー　そう、そう……。おもしろい話題、なかなか思いつきません。

フィリス　彼女は大変な読書家でね。もう読めなくなってしまったので、本はしまわれてしまった。

もう、お疲れでしょうか。

アニー　いえ、いえ。何でもきいてくださいよ。

いちばん楽しかった時はいつですか。いちばん楽しい思い出は？

アニー　いちばん、といわれても、なかなか答えられませんよ……いろいろ、あったから。とても楽しいこともあったし、とっても苦しいこともあった。晴れの日や雨の日のように。わたしは両方を受け入れるのです。

白人のことをどう考えていますか。

アニー　白人？　好きですよ。しかたないのですから……つまり……ひどく横暴な連中もいますけれど……自分たちがどういうふうか、気がつかないのでしょうね……でも、どこでしたっけ？　（フィリス「キャロウェイ公園よ」）　そこで何人かの白人に会いましたけれど、ほんとにいい人たちでね。いろいろ話して、時のたつのも忘れて。

この世の中は少しずつよくなっていますよ。ずいぶんと。そうでなかったら、わたしは生きてはこられなかったことでしょう。いつの世にも、不正な人というものはなくならないでしょうが。もちろん、憎悪も全部はなくならないでしょう。わたしたちのことは見るのも厭だ、という連中もいるのですものね、（笑って）見るのもいやだと。

神が人間をつくったのですから、わたしたちは愛し合わねばならないのですよ。南部にはまだまだ憎しみが残っていますが、やがてはよくなると信じていますよ。アトランタは全く変りました。白人の行く場所へ行けない時代もあった。いまは州政府の仕事についている黒人女性もいるのです。そんなこと、昔は夢にも考えられなかった。黒人の市長ですよ、いまは。ジョージア州アトランタといえば、「絶望の南部」だったのですよ。黒人の向上を認めない土地、ということでしたよ。神が見ておられるのです。神は示したかった。愛が勝利するのです。そうでな

ければおかしい。白人の隣人におはようと挨拶できなければ……。

フィリス　白人と黒人だけじゃない。ここにはアジア人もメキシコ人もいるのだから……そのことで人種問題は改善されるはず……

アニー　そりゃそうでしょうよ。それで雇用の機会が減るといっている連中もいますけれど、アトランタが栄えれば雇用も増える。よそからきた人たちがお金を投資することがなかったら、アトランタもここまでこなかったですよ。人は多いほどよいのです。そういう人たちを受け入れることです……それが自分たちのためになるのです！

フィリス　黒人と白人だけだった時は、白人の目には黒人は見えもしなかった。よその国から人びとが流入してきて、ようやく、白人は、いるのは白人だけではないことを理解したのよ。よそから人が入ってくることに脅威を感じる黒人は多いけれど、じつはそのことで黒人の状況はよくなったのよ。

アニー　若い人たちが正しい理想を持ってくれるようにと願うのですよ。でも、彼らは不注意で……。たがいにたがいの権利を認め合わねば……。

（白人が）インディアンの土地をすべて奪い圧迫したことを読みましたよ。でも、そのことの報いがありますよ。きっとありますよ。いまになって金を払おうとしているようですが、かつて奪ったものにふさわしい代価だとは思いませんよ。不正を働けば、報いがありますよ。アメリカは薔薇の花のように栄えてきた、でも他国に対して不正を働けば、ひどい目に会います、すぐにでなければ、子孫の時代に。こうしていまは楽な時代で……家を建てたりビルを建てたりしてますが……いつかバベルの塔のようにすべて崩れてしまうでしょうよ。聖書のバベルの塔のことを知りませんか。空にとどくような高い高い塔。高みに登るには限度がある、それがわたしの考えです。

もちろん悔い改めることはできます！　悔い改める時間はあります！　そうですとも！　罪は真紅ですが、悔い改めれば、雪のように白くなる。人びとはいつか、たがいに愛し合うようになりますよ。べたべたした愛のことをいっているのではありません。わたしの権利を尊重してほしい、あなたの権利も尊重しよう、ということです。

フィリス　女性問題について話し合ったことおぼえている？　人生、愛、女性について、あなたはとてもおもしろいことをいって……

アニー　そう、これはよい話題ですよ。

フィリス　もし夫が妻を虐待したら、結婚生活を続ける必要はない、といったでしょう？

アニー　わたしはさまざまな変化を目撃してきましたよ。夫と妻の場合、相手に対する期待にずれがあることがある。それが耐えられなくなる。そういう状況から逃れる方法はいくつもある。離婚はそのうちの一つでしょう。殺されるよりは逃げたほうがいいことがある……あは、は、は……虐待されても我慢して、あげく殺されるなんてつまらない。さっさと離婚して逃げることですよ……は、は、は。女性のほうが我慢しすぎているという場合を、ずいぶん見てきましたよ。でも、結婚の誓いでは、死がわれらを別つまで、というのですから……。

フィリス　虐待されたら、死ぬまで一緒にいるとは限らない、という条件をつけたらどうかしら。いい考えじゃないかしら？

アニー　その質問には答えられませんね。

他に質問があったら、たずねてください。

市民権運動に関りを持たれましたか。

アニー　関らなかったですよ。集会に出たのです。市民権を得るべきだという考えは正しいと思いました。しょっちゅうではなかったけれど、集会に行きました。どういう意見なのか知りたかったのですから。たいていは行きましたよ。

フィリス　彼女、演説もしてね、新聞の写真に出ていたのよ。

アニーさんは市民権運動のことは、もうそれ以上話そうとしない。三人はしばらく口をつぐんだままいた。もう辞さなければと思いながら、なおもわたしは居続ける。もうふたたび会うこともないように感じられて、細面のアニーさんの顔をスタンドの弱い光の中に見つめていた。深いしわはあるが、皮膚のぴんとはった顔。ゆるんだところのない顔。小さなからだは、わたしにさえ抱き上げられるように思えるが、何者にも冒すことのできない硬質の珠のようでもあった。

いろいろな家族の子どもの世話などされていた時、旅で行かれた先はど

ういう土地でしたか。

アニー　メインへ行きましたよ。あそこには岩が多く、波が打ち寄せていました。ざぶんざぶんと打ち寄せていました。メインに滞在した時は、いつも日没を見に行きました。それは見事なものでした。海のせいで、他のどこよりも日没が美しい、あそこは。

それまでは泳いだことはなくてね。人びとが水に入る水際のところはごく浅いのだろうと思ったのですよ。そこへ入ってみようと考えてね。ところが入ってみると、さあ、大変、わたしはもがき、金切り声を上げてしまいました。誰かが助けて、水から引き上げてくれたのですが、それ以来海水浴はしたことはないのです。だってね、水は深くて、しかも見渡すかぎりの水、水。高い波が押し寄せてきては崩れる。男が二人がかりで助けてくれました。もう、金輪際……といったのですよ。あの時ちょっと頑張っていたら、泳ぎをおぼえることができたでしょうにね。臆病だったのですね。おとなも子どもも泳いでましたっけ。水泳の経験といったら、それでおしまい。あとは他の子守りの女たちと海浜へ出て海を眺めるだけでした。

フィリス　子守りの女たちは皆黒人だったんですか。

アニー　そう、わたしの知ってたかぎりではね。白人の子守りには会ったことはなかったですよ。皆南部からきた女たちで、泳ごうとはしなかった。わたしは大胆だった。助けてもらって。また波が押し寄せてきて、金切り声を上げましたっけ。

ペンシルヴァニアへも行きました。アトランティック・シティへも行きました。あそこの防波堤のことは知っているでしょう……

フィリス　いまは新しいのができたの。火事やいろいろあったから。

アニー　そうでしょうね。

ウィックリー、ペンシルヴァニアのウィックリーへも行ってね。

フィリス　ウィックリーはペンシルヴァニアじゃないですよ。

アニー　山波が見えてね。小さな町でした。思い出せません。前には、そういうことは全部憶えていましたのにね。にわかに、記憶が消えてしまって。わたしから……。

汽車に乗ったこともありましたっけ。ある晩のこと、寝室に夕食が運ばれてきました。とてもおいしくて。ほんと

に楽しかったのに、船が岸を離れると……

フィリス　船！

アニー　全部吐いてしまいましたよ。

フィリス　船！　船に乗っていたの？

アニー　そう、そりゃあ、あれを船と呼ぶのかどうか。ともかく、ニューヨークに行った時のことで、ハドソン河沿いのどこかから、出かけるんで船に乗ることになったのですよ。

フィリス　じゃあ、やっぱり船に乗ったのね。その話は初めて聞きますよ。で、どうしたの？

アニー　だからね、夕食はとてもおいしかった。なんともおいしくて！でも半分食べた頃に、全部吐いてしまった。船が揺れると、そういうことになるものだそうですけどね。おいしい夕食を失って残念でした。すっかり残らず。そう、すっかり吐いてしまいました。

フィリス　いつもは汽車で旅をしたの？

アニー　汽車！　あったのは汽車だけ！　プルマン式ポーター……。もうなくなってしまいましたけどね。

フィリス　ちょっと。プルマン式列車のこと？

アニー　そう。

フィリス　まだ残ってるけれど、利用する人びとがすっかり減ってしまったの。

アニー　ああ、そう。

フィリス　（プルマン式車両を発明した）ミスター・プルマンというのは黒人だったのよ。知ってますか。

アニー　いえ、いえ。

ニューヨークで大きな所はセントラル・シティ・パークでした。ほんとによく行きましたっけ。とても広くてね。だからきれいなベンチがあって、飲み物もあった。セントラル・シティは大したものでした。

フィリス　セントラル・シティはこの町の公園よ。セントラル・パークでしょう？

アニー　そう、そう。あそこはとてもすてきでした。

子どもたちを公園へ連れて行かれたのですか。

アニー　連れて行かなければなりませんでした。毎日ね。ニューヨークにいた時は。おもしろかったですよ。公園のこちら側から入って行くと、新しい発見がある。あちら側から入ると、また何か新しいものがあって。（疲労が口調に表われはじめた）少くとも、わたしの目には新しいものが。

フィリス　テネシーのメンフィスにも行ったのでしょう？

アニー　ええ、メンフィスへ行きました。三年ぐらい滞在しました。いつもハミルトン氏一家と一緒でした。大学で教えていましたっけ。その後はアトランタ大学で教えて。（もうひどく疲れて）グレイスの夫。そう、そう、そう、そうです。憶えておくことができるなら、あれはよい思い出。

とてもいろいろな所へ行かれましたね。

アニー　そうですよ。自分の家からずっと遠くへ。でも、この界隈では行ったこともない所が多い。ディケイターとか。（弱々しく、やさしく、そっと）は、は、は、は……

フィリス　ついこの間、ディケイターに連れてってあげたのに！

アニー　フロリダへも行きました。親戚がいるのですよ。いい所ですね。死んだ人がいて、お葬式に行ったのです。たしかにいろいろな所へ行きましたよ。でも、一度行ってみたいのはカリフォルニア。まだ行ったことがないのですよ。

フィリス　飛行機に乗らないと行けないわねえ。

アニー　あはははは……じゃあ、あきらめなきゃねえ。

明日はミシシッピーのジャクソンへ発ちます。今晩は会ってくださってほんとにありがとうございました。

アニー　おいでくださって嬉しかったですよ。わたしに会いたいという人がいるときいて、喜んで会いますよと答はしましたが、たいした話はできないと思ってね。

でも、ずいぶん教えていただきました。

アニー　そうですね、百四歳としては、まあなかなかのものかもしれませんよね。あはははは……。自分でもそう思いますよ。は、は、は……。昔は詩が好きで、よく読んでました。ロングフェローの作品がとりわけ好きでした。それと、小学校三年の時におぼえたこの詩も気に入っているのです……ええと、ええと……ええと、何の話をしていましたっけ？

そういってから、アニー・アレグザンダーはしばらく考えこんで、やがて、ああ、詩のことを話していたのでした、と思い出し、諳んじている次のような詩句を誦した。

そして、わたしを谷へ行かしめよ
そのうるわしい花を見るために
そこでわたしはまなぶだろう
つつましく　育ち
大きくなることを

そして、その夏の夜から二年経って、アニーさんは亡くなられた。彼女は黒人が奴隷制のもとで生きた時代のなまなましい記憶と傷痕を見近かに見ながら成長した女性だった。解放後の自由を喜びをもって受けとめつつ、同時に多くの面で解放後にさらに苛酷さを増した黒人の生の状況に身をさらして、一世紀よりも長い時間を生きた。そして谷へおもむき、花を見てきたひとでもあった。

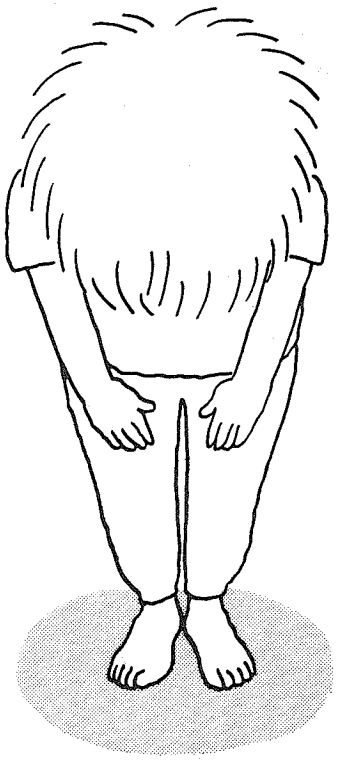
かくも長い嵐の中で／かくも長い嵐の中を生きてきた／おお神よ／祈る時間をもっとください／かくも長い嵐の中を生きてきた

これは十九世紀の黒人霊歌の一つの第一節だが、二十世紀も終りに近いいま、嵐はいまだ、やんだとも見えない。アニーさんは見えない眼を戸外に向けて、わたしたちが車で走り去るのを見送った。どうしても、といって。扉の上半分のガラス張りの部分に浮かんでいたその顔は、額縁に入れられた夢の中の絵のようだったが、いまでも、それを見たければ、わたしにはすぐ見える。どこにいても、振り返りさえしたら、すぐ見える。

小僧寿司

玖保キリコ

じっと 待ってる



流れた時のゆくえ

藤井久子

「西紀一九八五年（檀紀四三一八年）」

ソウルの街頭で、なにげなく買った『朝鮮日報』の日付を見ると、そう書いてあった。「檀紀」の意味がわかるまで、ちょっと時間がかかった。檀君神話による、建国からの歳月なのだ。「四三一八年」といわれても、ピンとこない。この国の人々にとって、それがどれ程の意味を持つのか、現実性がある数字なのかも、わからなかった。

ほかにも何紙かの新聞を買ってみたが、「檀紀」が入っていたのはひとつだけだった。このへんが伝統的民族紙とされる『朝鮮日報』の特色だろうとなかみが読めないので勝手に納得した。

韓国の人々は一年のだいじな行事を陰暦にしたがって行っている。カレンダーではお正月は新暦の三が日に祝うことになっているが、実際には旧正月がホンモノとして生きている。その点で『日刊スポーツ』が西暦のほかに陰暦を添えているのは、けっこう実用的じゃないかとも思った。

韓国を訪れたのは二回目だ。板門店ツァーの一日と、扶余へ二泊三日で出かけたほかは十日ほどソウルにべったりいた。

初めて韓国へ行ったのは一九七八年の夏。あれから六年半。そこらじゅう工事中だったソウルはいまではぴかぴかの高層ビルディングやカラフルな高層団地を持って「現代都市」の景観を備えている。バスに頼りっきりの市内交通も、地下鉄の大躍進で一変した。目を引いたのは公衆電話ボックスと、ハンバーガー・ショップに代表されるファースト・フードの店があちこちに出現したことだ。そういった、「新しい」ソウルの部分では、例えば、地下鉄の構内が渋い赤レンガで装飾されていたり、ロッテリアのおねえちゃんが「ワン・ハンバーガー、ツー・コーヒー」とのたまわったりおよそ「檀紀」などというものにリアリティがあるとは信じられない。

最初の旅行で得た韓国の印象は「元気」の一言におしこめることができる。夜間外出禁止令がまだあったころで、それでも人々の動きは活気に満ちていた。どんなにワクにはめこもうとしても、ぼろぼろとはみだしてくるエネルギーを感じた。「現代都市」の中で、あの「元気」はどうなっただろうと、地下鉄の構内に並べられた新しい団地の完成予想図や間取りに見入る人たちを私はぼんやり眺めていた。

扶余へ行ったのは前に新羅の都、慶州へ行ったから今度は百済の都を見ようという、単純な思いつきからだ。なんとなく学生時代に装った「知的好奇心」が顔を出したみたいだけれど、奈良時代に密接な関係にあった百済を見たかった。博物館で見た瓦や仏像は、ほんとに奈良時代とつながっていた。さらに朝鮮半島を通しての中国とのつながりもみえてくる。ただ、現在との関係がつかめない。

三十分も歩けばだいたい大きさがわかるくらいの、こじんまりした扶余の町。その町を見下ろす扶蘇山の上に、かわいらしいあずまやがある。足下をゆるやかに蛇行する白馬河に守られたこの山が、かつて百済の王宮のにぎわいをこだまさせていた。あずまやのある岩は「落花岩」と名付けられていた。新羅の手におちた王宮の三千人の女官が、ここから白馬河に身を投げたのだという。彼女たちの霊を慰めるためにあずまやが建てられたのは、なんと今世紀になってからだった。千三百年近い歳月の後に。

あるいは李朝を次々に襲う、日本も含めた外圧への抵抗をそんな形で現したのかもしれないと考えていた私の前に、ナップサックを肩にした女子大生風のグループがいた。友だちどうし、ちょっとハイキングにといった様子のなかのひとりが言った。

「身を投げたのは悲しいけど、ひとりじゃなくて三千人も友だちといっしょなんだから、寂しくないわね」

ヘアスタイルからズボン、ジャケット、靴までまったく韓国の現代っ子らしい彼女たちが、千三百年の隔たりをこえて女官たちの身の上を自分にすっと引きつけられるのに驚いた。私はそんなふうに奈良時代に生きた人々を思ったことはない。この国の人は、大きな時の流れのなかに自分を見いだせるのだろうか。かりにその流れを「檀紀」と呼んでいるのなら、ぜんぜん意味がないわけでもなさそうだ。

「檀紀」を見て思わず私は「皇紀」を連想したのだけれど、それはまったく異質のものではないか。ならば「檀紀」を具象化したもの、継承するもの

はいったいなんだろう。

ソウルは李朝の都として始まった街だから、その王宮や李家代々の霊を祭る廟が旧市街の北側に広大な部分を占める。

そのひとつが「秘苑」とよばれる、庭園と王宮だ。定刻にガイドつきで見学できる。たまたま私が行ったときは日本語のガイドがつく時間だった。ガイドというよりは博物館の職員みたいな雰囲気の、ちょっときれいなおばさんが案内についた。冬のさなか、日中でも気温が零度をこえないときとあって、散歩をしようという観光客は多くない。

代表的な韓式庭園だとガイドブックにあった秘苑は、晴れ渡った青空の下でうち捨てられたようにひっそりとしていた。いくつも作られた池は、みんな四角くて、ごんごんに凍っていた。この池を作った人たちは、世界は四角いと考えていたそうだ。一歩出たところにあるソウルの雑踏を忘れさせるくらい静かなたたずまいは、すっかり過去になりきった空間のように感じられた。

仁政殿という建物には、からし色だったと思われる厚手のカーテンときらびやかなシャンデリアがあった。一八世紀にフランスから取りよせたものだという。赤と緑を基調に、柱の上部や軒に彩色した伝統的様式の建物とフランス製のカーテンのコントラストが、妙になまなましく李朝が存在していたことを感じさせる。そして、現在の静けさをいっそう際だたせていた。

庭園のおくに向かって歩いていくうちに、案内のおばさんが塀に囲まれた建物を指して「ここに日本からお嫁にきたマサコさんが住んでいます」といった。

不勉強なことに、私は政略結婚で李家に嫁がされた方子という人がまだ生きていることを知らなかった。一九一〇年からの三五年と、四五年からの四〇年の重みがいっしょくたになって私をうちのめした。外の世界に流れる時からまったく隔絶されたかにみえる秘苑で、ひとりの人の生のなかにその時は確実に刻み続けられている。その時の重みのすさまじさを初めてからだで感じた。八五歳になるその人の生は、私が頭のなかでわかったつもりでいた「歴史的事実」がいかに薄っぺらなものかを思いしらせた。人の気配も感じられない、ましてや生活の匂いもない秘苑の暮らしはひどく寂しいもののように思え、その建物の前で私は立ちつくしてしまった。

「日帝三六年」とひとことですまし、あれからすでに四〇年とうそぶくことなど到底できないのだ。それが日本で

は頭でしかわからなかった。時の流れを受けとめておくことができない。

街に出て、忙しそうに行きかう人たちにまぎれて市場へ行った。城壁都市のなごりであり、いまは重要文化財になっている東大門の側にソウル一の東大門市場の喧騒がある。ぬらぬらと電球の光を鈍くはねかえす大きなタコやカーテンみたいに天井から吊るされた干した魚。平たい籠に盛られたなつめ、ぎんなん、松の実。泥のついた葱の束もあれば、みかんの山、「富士」とシールをはったりんごも並ぶ。

値段を書いてあるものはひとつもない。常に買手と売りては値段を巡って言葉をかわさなければならない。双方に取って納得のいく値段に落ちつくまで、やりとりは続く。キムチといっしょにつけこむカキやアミの樽に屈みこんで、延々やり合うおばさんたちは六年半前と同じ表情を持っているように見えた。

煉炭こんろで焼いたピンデトックやどんぶりばちというよりは洗面器にちかいボウルにたっぷりのおしるこ、スープの湯気の向うから、おばさんたちの客を誘う声がとびかう。わさわさした市場の空気に包まれていると、ああソウルだ、韓国だと思う。

たぶん「檀紀」を目に見える形ではみつけられないだろう。そのことばにこだわることもない。四三一八年でも五〇〇〇年でもかまわない。それはこの国の人たちの生活のなかに息づいてきた季節感であったり、食卓を彩るおかずなんじゃないか。そういったものの上にたつ韓国の人々は、六年半前とかわらず、首尾一貫して元気だった。

冬の韓国はオンドルのここちよさ、キムチのおいしさ、人の親切でやたらに楽しかった。なごり惜しさを手当りしだいの人に伝えたいような気分で乗った飛行機から見た韓国は、見渡す限りに低い山が連なり、そのあいだを川がうねうね流れる美しく、静かな顔をしていた。

二時間足らずのあっけない帰り途で東京に着いたとき、私はたっぷり韓国の余韻を持っていた。ふと手にした新聞を見て、愕然。

一九八五年（昭和六〇年）

「昭和」のなんと軽薄なこと。時をこまぎれにすることで過去を風化させていくのが日本なら、大きな流れにつながるものとして自分をとらえるのが韓国じゃないか。だから、「日帝三六年」も忘れさられることはない。だからあの国の人たちは首尾一貫した「なにか」を持っている。

「昭和」は私の「首尾一貫」になり得ない。

サイアムホテルの女たち
―エン

荘司和子

バンコクの日本大使館の前を通り過ぎてほんの少し行ったところに、サイアムホテルというなんだかうらぶれたホテルがある。いつも夜来るものだからほんとうはきれいなのか、古ぼけているのか分らないのだけれど、入口は真暗だし、ロビーに入っても薄暗くて人もろくにいないから、これは四流ホテルだという感じがいなめない。ロビーと直角につき出た平屋部分が「コーヒーショップ」と呼ばれているカフェバーで、中では四流バンドがつまらない歌をがんがんやっている。ここのコーヒーショップは、フリーの売春婦たちが客ひきに集まってくるところで、有名なグレースホテルに次いで人数が多い。以前カラワンのモンコンたちが深夜に連れてきてくれた時は、超満員で、女たちだけでも一〇〇人かそれ以上いそうだった。女の客というのはふつうはいない。それでわたしはいつも

「ボーイフレンド」を確保してからやって来る。

その晩はまだ九時ごろだったので、お客はほとんどいなくて、女たちがところどころに二、三人ずつすわっているだけだった。退屈しのぎにゲームでもやっているような手つきで、一皿のスイカを三人でつついている女たち、おひや一杯だけでポツネンとすわっている女、おしゃべりしながらも鏡をのぞきこんで化粧なおしに余念がない女……。ひとわたり見てまわったけれどわたしがさがしている女は来ていない。その二、三日前来た時に、わたしに孤独な背中を向けてずっとすわっていた女だ。声をかけてみたらわたしたちはすぐに気が合った。色白でふっくらした身体を黒いワンピースで包んでいるのがよく似合う。離婚して二ヶ月前にジャンタブリから出て来たと言った。

そのうちやって来るだろうと思って待つことにした。その日の「ボーイフレンド」ミスターXが気を遣ってボーイに訊いている。「性格がよくて話好きなコ、呼んでくれない？」「ここに来てる女なんてろくなのいやしないですヨ」　じっとすわってあたりをキョロキョロしているとなんだか落ち着かない。今日も売れないのではないかというあせりとか、自分だけは売れるんだという競争心とかが、ひたひたと伝わってきてしまう。仕方がないので、女たちが集まっているところに行って彼女のことを訊いてみた。分ったことは、彼女の本名はジャントゥックで、その日の朝ジャンタブリに帰ってしまった、ということだった。

がっかりして席に戻って来る途中ばったり出会った女のコがエンだ。背が低くてコロコロとマリのようにふとっている。前回案内して来てくれた新聞記者と顔見知りのようだった。どう見ても中三ぐらい。もちろんお化粧もしていない。日本の女学生のほうが彼女よりよほどませている感じだ。わたしと出会うと彼女は、懐しい友だちに会ったみたいに嬉しそうに両手でわたしの手を握った。わたしの方も思わず嬉しくなって、自前の大声でさけんでしまう。「ワー、また会えてよかったネ」

わたしの隣りにすわると間もなく、彼女は突然自分のことをしゃべりはじめた。「わたしネ、十五歳のとき処女を売ったの。ほら、そこのアスターってホテルで」「わたし父親におそわれそうになって、それでアントンから家出して来たのヨ。それからバンコクに来て……」　彼女の話はどんどん続くのだけれど、訛りがひどくてよく分らない。わたしの方も彼女の話を聞く心の準備ができていなかったのであわてている。彼女の値段は、ショートで四、五〇〇バーツ（四、五〇〇〇円）。そ

こで改めて彼女にその夜の御相手を願った。普通はここで「ボーイフレンド」をじゃけんに追い帰すのだが、この日は標準語の「通訳」がいりそうだったのでミスターXにも同席してもらった。

わたしたちはバーの一番すみに席を移した。それでももの凄い「騒音」からは逃げられない。テープレコーダーを、目立たないようにテーブルの下つまり彼女のひざの上で持ってもらう。テープのスイッチが入ると彼女は、急にしんみょうな顔つきになった。ちょっぴり不安だ。

わたしってネ、お客の気ひくことができないのヨネ。いいお客だったらうまくいくんだけど、分らないでしょ。強引にさそったりできない。だからお客があったりなかったり。毎晩ここへ来てるけど、お客みつからないこと多い。最近で三回しかお客ついてないの。

それに警察が来るし。つかまれば留置されちゃうのヨ。おとといも二人つかまった。罰金とられてそれから十日間拘置されるの。罰金は三〇〇〇バーツ。そこのマッカサン警察署の警官がしょっ中来てる。警官とただで寝ることになっちゃうワケ。断るとつかまっちゃうとかサ。だいたいネ、終ってから警官だって言われるんだから、ひどいよ。ここの女たちの四人に一人は、こういうめにあってる。警官だっていい人もいる。あの人たちも自分の役目が分ってるから、遊びは遊びって分けてるの。わたしと仲良くしてくれる人もいるよ。だけどそんなのってすごく少ない。たいていはろくでもない。一度寝た警官なんかね、泊まりで三〇〇バーツっていうのよ。もう明け方の四時で、客がとれてなかったからそれでも行くことにしたの。そしたら朝七時ごろ目を覚ましてもう一回やれっていうの。一回の約束でしょ、それはできないっていうと、どうしてだ、分ってんだろ、逮捕される身だってこと、っていうのヨ。そんなことできないでしょ、っていったら、あと一〇〇バーツ払うって。わたし泣きだしちゃったの。警官って市民にこういう仕うちするんですか、友だちに言ってまわるワ、っていったらその男黙っちゃった。それからここで会っても知らんぷり。今日も来てるから、教えてあげるワヨ、どの男か。もうあの警官とは行かない。ぜったい。

わたしに親切にしてくれる警官もいる。一度寝たことあって、またここで会ったらネ、その人わたしの手をつかんで引張ったの。すごくぎょっとしたワ、つかまるのかと思った。そしたらネ、もうすぐ新年だから手入れがあるから気をつけろって教えてくれた。その晩はその人と行ったの。夜中の二時

ごろだった。それから三時ごろまでしゃべっていて、四時には帰った。それで五〇〇バーツくれたワ。

手入れの時だって私服で来るから、お客と見分けがつかない。二、三ヶ月に一回くらいあるのヨ。だからいつも気をつけていなくちゃならない。わたし今十六だから、まだ市民証がないの。十七になると市民証もらえるから、バーにだって勤められるし。十七歳以下でつかまったらネ、「恵みの家」に入れられちゃうの。少年院のことよ。畑したりネ、何年も働くの。三〇〇〇バーツの罰金って、十七歳以上の場合。

わたしの家ってネ、父さんと母さんが別居してたの。小さい店やってて、うどんとかジュースとか、潅漑で使う部品とかおいてた。母さんはお寺にいるの。尼さん？　じゃないワヨ。お寺の手伝いして、お寺においてもらうの。アル中で、毎日すごくお酒飲むの。家にいたころはこんなじゃなくて、よく働いてた。父さんがあんなじゃなけりゃ、なんとか食べていけたのに。父さんはわたしと姉さんのことしょっ中なぐるの。わたしなんか腕の骨が折れたことが一回、気を失ったことが三回もある。母さんが出て行ってから、新しい女が入ってきて、わたしたちのことかわいがらない。自分の子二人連れてきて、そっちだけかわいがるの。わたしたちが新しい母さんとけんかすると、父さんはその女の話だけ聞いてわたしたちをなぐる。わたし小学校しか出てないの。その女が、自分の子が小学校しか出てないから、それでいいって。兄さんも学校の先生も中学に行くように言ってくれたけど、お金がないからダメだって、行かせてもらえなかった。

まず姉さんがやられたのヨ。父親におそわれたの。あの人は身体も弱いし、気も弱いからたいへんだったワ。泣いてばかり。「父さん、あたし父さんの子供よ。自分の娘に何するの」って言ったんだって。そしたらネ、「おやじを助けると思って、お願い、お願い……」って哀願するんだって。姉さんは逃げられなくて父さんのするままになった。二回もヨ。それから家出しちゃった。今はインド系マレーシア人と結婚してる。

姉さんがいなくなったから、こんどはわたしがおそわれたの。でもわたしは姉さんから聞いて知ってたからやらせなかった。家を飛び出して走って逃げた。伯母さんの家に泊めてもらったの。伯母さんと二人で泣いた。母さんには言わなかった。言えないヨ、こんなこと。次の日父さんがやってきてネ、すごく腹たてていて、殺してヤル、とかいってなぐられた。気を失ってネ、その傷が治ってからバンコクに出てきたの。

この伯母さんから五〇バーツ借りてバスでアントンからミンブリまで行った。そこに母さんの弟がいてここでも五〇バーツ借りたの。この叔父さんがバンコクまで送ってきてくれて、知りあいの家の子守りにおいてもらった。歳？　十四歳だったワ。

家はパクナム（バンコク郊外）にあって、お役人。子供が二人いて、奥さんも二人。正妻さんと二号さん。それぞれ別の家にいるの。奥さんは知ってて何も言わない。二号さんはちょうどおなかが大きかったワ。タイの男ってみんなこうなんだから！　たいてい二号さんいる。わたしは奥さんのとこで働いてたの。二歳と一歳の男の子のめんどうみて、台所仕事、ソウジあとなんでもやって月給が三〇〇バーツ（三〇〇〇円）。小さい子っていっぺんに泣くのヨ。同じオモチャとりあったりして。どうしようもない。主人とも気が合わないし、月給安いし、二ヶ月半くらいでやめちゃった。

パクナムのマッサージパーラー（トルコ）で働いてた女のコと友だちになってネ、彼女が仕事紹介してくれるっていうから。それでやめて四、五日したら彼女から話があったワケ。「処女を売る」っていう話。お金がまるでないんだもん、受けるしかないじゃないサ。彼女の他にあっせん屋の男がいて、半分ずつ分けるの。二〇〇〇バーツずつだった。その友だちはわたしにできるだけでいいって言うから二〇〇バーツあげて、あと伯母さんや母さんにも送ってあげたの。でもサ、あとで知り合った別の女の話じゃ、処女は八〇〇〇バーツだってとれるし、五〇〇〇、六〇〇〇はかるくとれるんだって。そんなこと知らなかったもんネ。その人に先に出会ってればよかったけど、しょうがない。

その時の客？　華僑よ、年いってる、豚肉をあきなってるとか。こわかったわ。何がなんだか分らなかった。父親におそわれたときのあの姿、思い出して……。こわくて目つぶって、涙流してずっとふるえてた。血が出ちゃって四、五日休んだら、友だちがまたさそいに来てここに来たの。最初の晩はお客とれなかった。

ここにすわってるのよ。お客が呼んでくれたらそこへ行ってすわるの。お客によってはボーイにチップをやって呼ばせるの。チップやらないと呼んでくれない。（なるほど！　どうりで！）ボーイなんてそんなもんよ。だけどサ、しゃべってるだけなんてこともあるよ。わたしと寝てくれるのかって訊く女もいる。だって、すわってるだけじゃ時間の無駄じゃない。訊くと二〇〇バーツしか持ってないなんていう男いる。これじゃあホテル代にしかなんないよ。

お金あるのに安い女さがしてまわる男もいる。それからサ、一人二〇〇バーツで何人も連れてく男。いっしょにやるのよ。恥かしいじゃない。わたし行かない。

暮らしは楽じゃないワ。なんとか食べられる。アラブ人の団体客が来ると景気いい。この間二〇〇〇バーツもらっちゃった。母さんに一〇〇〇バーツ送ってあげた。アラブ人っていえばネ、この前このホテルで五〇〇バーツでやったんだけど、大きくて入らないのよ。どうしても。それで下りてきてここで何か食べてまた上ったの。それでもだめだったんだけどまた五〇〇バーツくれたワ。お金が入ってくると遊んじゃったり友だちをおごったりするのよ。でもこういう仕事って危険に身をさらしてるのヨネ。警察にねらわれてるし、それからお客だって危険ヨ。終ってから浴室に入ってる間に逃げられちゃうの。だまされるの。もう十回以上そういうめにあった。でもこのホテルでやる時は安全よ。ここはお客が逃げられないから。

ほら、今入って来たの、そこのマッサージパーラーで働いてる女たち。あっちの仕事が終るとここへ来てもうひと稼ぎするの。そこにモナリザって大きいのがあるでしょ。日本に行ってた女も多いワヨ、ここ。親しい人？　いないワ。だいたいあのひとたちってピンポン玉みたいなんだから。えーと、コロコロ言うことが変わって信用できない、って意味ヨ。たとえばサ、ここで会ってネ、春雨いっしょに食べて半分ずつ払おう、とかって言うの。それで食べ終ってトイレに行ったまま消えちゃって払ってくれない。あの連中って日本に行ってどうだった、こうだった、恋人が日本にいるとかってサ。

わたし？　日本に行きたいなんて思わない。だまされたらこわいもの。聞いたことある。連れていってくれるっていう人にお金払って、それで迎えが来ないとか、準備ができてないとか言われてそのうちいなくなっちゃう。ほら、あそこにすわってる赤いブラウスの女、パスポートだけできちゃった。あのひと前にサウジアラビアに女中の仕事で行ったの。月給五〇〇〇バーツで。そんなに長くいないうちに主人とけんかして送り返されたんだって。二回目のときだまされたのヨ。そのくせ彼女わたしにも行こうっていうの。いやだワ。

ボーイフレンド？　そんなのいないワヨ。女の友だちならいるけど、男なんて。男を好きになったことなんてないもの。お客でいいひとと出会ったことはあるヨ。そういうひとは好きだけど。恋人になりたいなんて思うひとないワヨ。たいていは部屋に入るなり

おそいかかってきて痛いだけ。お金のためにがまんするしかない。女の友だちなら何人かいるワヨ。でもだいたいは競争だからネ。性格よくない女もいるし。うそつきでサ。今、友だち三人で一部屋借りてるの。部屋代は六〇〇バーツ。だけどサ、みんなわたしより年上で、子供がいたりして仕送りしてネ、それでラミーとかやってお金すっちゃってわたしに五〇バーツ貸してとかってサ。みんな大人なのに、いやネ。

よく子供のくせに、とか子供のやることじゃないとか、不潔とかインバイとかいろいろ言われる。恥かしいときもあるけど気にしない。こんなことしてるって兄さんも姉さんも知らない。母さんにだって言わないヨ。兄さんは兵隊でどこかに駐とんしてる。姉さんもどこへ行っちゃったかわからないもの。母さんにはときどきお金送る。母さんに会いたい。会ったら泣いちゃうネ。一人っきりになると、母さんのこと思い出して涙こぼれる。いっしょにいる友だちが、泣かないで、こんどいっしょに行こうネっていつも言うの。でもまだ行ったことない。こんどの新年には行けるかなあ。

でもサ、今の方がましよ。ダンナだっていない方がいいヨ。男なんてすぐまた別の女つくるから。でもネ、誰かから父親の話ネ、いいお父さんの話聞くと涙こぼれちゃう。自分の父親ってなんて人だろうって思って。テレビ見ててもネ、やさしいお父さんなんて出てくるとこみあげてくる。こんないい父さんいたらいいのに……って。

母さんに会いたい……それだけヨ。

カチンという音がしてテープが終った。いいタイミングだ。テープがきれると同時にわたしたちの緊張感もほぐれた。疲れた。

エンが「通訳」氏をさして訊く。

「今夜はこのひとと寝るんでしょ？」

「ワッハッハ。ワッハッハ。かわいそうじゃない、そんなこと言っちゃ。このひとまだ若いのに。大学院の学生さんヨ」

「ふーん」

と、まだ納得しかねた顔をしている。彼女たちの世界では年令なんて超越しているのだ。なるほど。なにはともあれ会話にまた笑いがもどってきた。

十二時半をまわっている。エンはわたしたちをホテルのロビーまで送ってきた。ホテルの前の暗がりの中でわたしはふりかえってみる。彼女はまたコーヒーショップの中に消えていった。

エンをさがしにわたしはまたこのホテルにまいもどってくるにちがいない。

編集後記

なにかに導かれて、この号はできあがった。

一九八〇年の春、なんの必要性もないのに、タイ語をまなぶことを思いついて、アジア・アフリカ語学院に通った。そこでタイ語を教えていたのが荘司和子さんだった。同級生に永井浩さんという毎日新聞のひとがいて、彼はその講座がおわると、タイへ赴任することがきまっていた。タイに関する情報を集めていた彼のために、まだ新聞のころの水牛をもっていった。それにジット・プミサクの詩が載っていたものだから、ちょうどプミサクの本を出す準備をしていた荘司さんと、あらためて出会ったのだった。

今はかくのごとくワープロでまかなっている水牛だが、月刊にした五年前は、写植でスタートした。高田馬場の駅から早稲田方面に歩いて五分ほど行ったマンションの一室に日本アジア・アフリカ作家会議の事務所がある。雑誌や資料でいっぱいのゴタゴタの中にさらに間借りしていたのが「軽気球舎」という写植屋で、はじめの二年くらいはそこで打ってもらっていた。藤井久子さんは軽気球舎ではなく、日本アジア・アフリカ作家会議の事務局員。原稿をもって行ったり、校正に行ったりするので、そのたびに藤井さんと話すことにもなるのだった。

藤本和子さんの『塩を食う女たち』を読んだら、一瞬、頭のなかがスッキリ晴れわたったみたいだった。この本が出たのは八二年十月で、わたしが読んだのは、それから半年もたってからだが、ちょうどそのころ、アメリカはイリノイ州に住む藤本さんがたまたま東京に来ていたので、幸運にも会うことができたのだった。初めて会ったとき、藤本さんに「あ、お久しぶり」と言われておどろいた。何日か前に、水牛楽団が渋谷のジァン・ジァンに出たのを見たので、あなたの顔はしっているから、きょうは初めてじゃない、と言われて、なんとなく納得した。

もっとも最近出会ったのは、玖保キリコさん。この四月十二日、五反田の簡易保険ホールに「マタイ一九八五その人は何もしなかった」を見に行った。そこで、坂本龍一さんが玖保さんを紹介してくれた。毎月『La La』を買って、まず最初に「玖保キリコ先生」の「シニカル☆ヒステリー☆アワー」を読む。「はじめて読む方へ。主人公とはいえ、ツネコは意地悪でウソつき、時には人をヘーきでぶちます。でも、本人は〝いい子〟を目指してたりして結構カワイイところもあります。ヨロ

シクね♡」などと今月は紹介されているが、ツネコはかわいい。断然かわいいので熱愛している。玖保さんのサイン入りの本をもらって、うれしいわたしは、それをわざわざ如月小春さんにみせびらかし、彼女をくやしがらせた。ツネコをみならったのね。

というわけで、この四人の女たちに、今月号のページを使ってください、好きなように、とわたしは言った。断わられたときのために、と、あといくつか、考えていたことがあるが、そのようなことはなく、ないばかりか、いつもより４ページも多くなった。

水牛楽団＋如月小春とＮＯＩＳＥの「野の音コンサート」は五月十五日目黒区民センターのあと、二十、二十一日帯広、二十二日釧路、二十四日札幌と続きます。

次号の編集は平野甲賀さんです。

（八巻美恵）

＊**予約講読**の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名　水牛編集委員会
口座番号　東京四―九一七九二
購読料　一年分三〇〇〇円（送料共）
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

＊本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二―三五五七
ブックイン（阿佐谷）☎三三〇―七八九七
信愛書店（西荻窪）☎三三三―四九六一
ワンラブブックス（下北沢）☎四一一―八三〇二
アール・ヴィヴァン（西武池袋店12Ｆ）
カンカンポア（西武渋谷店Ｂ館Ｂ１）
ストアデイズ（六本木ウェイブ４Ｆ）
名古屋ウニタ書店　☎七三一―一三八〇

水牛通信　第七巻第五号　一九八五年五月十日　定価二〇〇円　発行人＝堀田正彦　発行所＝水牛編集委員会　〒154
東京都世田谷区新町２―15―３八巻方
電話〇三（四二五）九六五八　振替口座東京四―九一七九二　印刷所＝㈱トライプリントショップ